

制は、当時の歴史的規定をうけた日本人の存在を前提とし、それに対応し、かつそれにある程度依拠して構築されたのであった。またそれ故にこそ、多くの国民を獲得することができたのである、とする。

本書は、前著『日本近代思想の成立』とほぼ同じく明治維新から明治三十年代にいたる明治期の主要な思想を分析対象としながら、右にのべたような分析視角を駆使して、前著とは全く趣きの異なったものになっている。

以上、本書の現在における近代日本思想史研究上の位置、ならびにそれをもたらした問題意識、分析視角について簡単な紹介をおこなってきたが、最後にそれらについての一、二の問題点を指摘しておこう。

一つは、ナショナリズムを資本主義時代を貫く問題として、とりわけ帝国主義の問題として把握するという問題意識に共鳴しつつも、ナショナリズムの問題は資本主義社会をもっておわるのであろうかという単純で素朴な疑問である。現代における社会主義国家であるソ連や中国、またベトナムの問題は、ナショナリズムと無関係にあるのだろうか。また現代日本のことを考える

場合においても、「真の民衆はナショナリズムを克服する」と単純に割りきれられるものか、ということである。

二つには、そのことは、とりもなおさず、著者はナショナリズムとは国家主義・民族主義・国民主義の「三者の統一あるいは、その三者を部分とする全体である」とナショナリズムの総体的把握の指摘を行いながらも、本書においては、事実上それを国家主義思想という側面だけに他の二者を収斂させてしまっているという問題である。つまりナショナリズムの構造的有機的把握が不十分におわっているということである。

もつともこれらの問題点は、簡単に答えの出せるものではなく、著者を含めて、私たちの今後の課題というべきであろう。

ともあれ、本書は、最初に述べた如く、現在の近代日本思想史研究においてユニークな位置を占めるものであり、とりわけ近代天皇制国家のイデオロギー研究の意欲をそそのかに十分な著作であり、さらには「底辺思想」研究にも新たな課題を与えたものと言える。

また、現代日本のイデオロギー分析、批判においても、一つの貢献をなすであろうことは疑いのない事である。

(A5版二九二ページ 一九七二年一月刊
青木書店発行 定価一、五〇〇円)
(中島三千男・京都大学大学院学生)

更池村文書研究会編

『河内国更池村文書 第一巻』

河内国丹北郡更池村は、現大阪府松原市にあり、文禄検地一四四石余の小村であったが、初期には天領、のち秋元領として幕府中枢部の支配に属し、堺から大和へ通ずる長尾街道が村内を貫通し、狭山池西除川溜池灌漑地帯にふくまれるなど、近世畿内農村として一つの典型たるを失わない条件をもち、その上多数の古文書が旧庄屋田中氏宅に保存されていた。

このため、高尾一彦氏によって神戸大学の「研究」三号(昭28)にこの村の村落構造が分析発表されて以来、多くの研究者の注目をひき、史料を利用した人の数も知らない。主としてこの史料によって論旨を展開した単行本だけでも、高尾氏の『近世の農村生活』(昭33)、葉山禎作氏『近世農業発展の生産力分析』(昭44)があり、私も『近世封建社会の基礎構造』(昭42)で

大きな恩恵をうけた。

ところで、更池村には被差別部落が存在していた。そのことはすでに発表された諸論稿においても論及されている。文禄三年の検地帳登録人四二人中二四人が「かわた」として登録されながら、耕地の保有反別はわずか一町一反四畝一五歩・持高一二石八斗九升四合にすぎず、一人当平均四畝余、三反以上保有者は一人もいなかった。たんに極端に零細な耕地保有を強制されたにとどまらず、かれらは村内で最も条件の悪い低湿地に一郭を画して集住せしめられており、すでにこの時点で、身分的な差別が社会経済的にも居住のうえでも明確にあったことを推定させている。

紹介

被差別部落の住民に対する身分差別が、歴史的には幕藩体制下の身分制度に直接の起源をもつことは、今日一般に認められているが、その形成過程、成立の画期等については若干の議論があり、また、それが社会構造全体の中でどのように位置づけられ、時代とともにどう変化したかはさらに研究の余地を多くのこしている。更池村の史料をもちながら、これまでは、主として部落民の生活実態、および本村農民との関係を

示す史料の不足から、十分な追求がなされないで来た。しかし、実はそれでは片手落ちであり、江戸時代の農村・農業および農民の研究として完結したものにはならない。

このたび刊行された更池村文書は、現地における部落解放運動が成長する中で、住民の間に過去の不当な差別や屈辱に負けることなく、それと直面していこうとする積極性が根を張ってきはじめてのことにたえて(序)、運動の関係者と文書の所蔵者と歴史研究者が研究会をつくり、田中文書のほか若干の文書を加えて、三巻の予定で発刊されることになったものという。歴史家としては、酒井一・宮川満・森杉夫・山口之夫氏ら周知の人びとが加わっており、信頼できる仕事といえよう。近世の部落関係史料として、われわれはすでに『奥田家文書』(六巻まで既刊)、『播磨国皮多村文書』などをもっているが、本書はさきに述べた研究史上の位置もあって、この問題の研究に一層貢献するものと信じる。

第一巻には、宝永二年から明治初年にかけての更池村の明細帳類八点と、寛永二十一年の家数人数万改帳、それに万治二年から明治七年までの七六点にのぼる宗門帳類をおさめている。いずれも研究史上よく知ら

れたものばかりで、こうしたかたちで多くの人びとの検討にゆだねられることが可能になったのはまことによろこばしい。なかでも、万治三年正月の河原宗旨改帳から寛文十年の穢多宗旨改帳にいたる一連の帳は、被差別身分の宗門改めとして最も早い時期のものとして注目され、また、高尾氏が前掲書等で分析を加えた寛文から元禄末年にかけての宗門改帳類もすべて掲げられている。

寛永二十一年の家数人数万改帳を手元の写真と照合してみたところ、河田善右衛門の「男子太郎廿五」歳が「十五」歳に、同久兵衛の「男子衛門」が「六右衛門」に(四六・四七ページ)誤まっていたほか、写真では断定し難いが若干不審な点が一、二あった。歴大な近世史料の複製だけにわが身につまされる気もあるが、貴重な史料であるから、より一層の正確さをのぞむことは決して本書の価値をきずつけることにほなるまいと思ひ、あえて参考までに示しておく。最後に、本書刊行の完結が一日も早くなされるように期待して、紹介の筆をおきたい。

(A5判九九一ページ 昭和四十六年一〇月刊
部落解放研究所発行 頒価六、〇〇〇円)

(朝尾直弘・京都大学文学部助教)